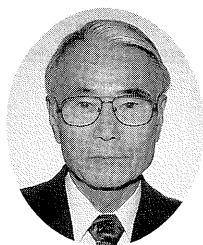


巻頭言

新緑の季節に想う



(財) 日本植物調節剤研究協会 評議員
(財) 日本植物調節剤研究協会 北海道支部長

藤村稔彦

5月になると、北海道でも野山はすっかり春の装いになる。草木が芽吹き、淡い紅色や黄色の新芽が、日ごと緑に変わっていく。遠くの山並みの残雪が、やわらかな緑を一層引き立てる。農地には、小麦畑の濃い緑がモザイク状にひろがり、その間には種子が播かれ、苗が植え付けられ、やがて辺り一面が緑一色に変わる。

毎年見慣れた風景ながら、4月初めまで白い雪と暗褐色の木々だけの、色彩に乏しい数ヶ月を過ごしてきた目には、何とも新鮮に映る。この時期は日差しも強いので、新緑は一層映え、緑の間には早咲きの花々が彩りを添えてくれる。

そのような光景の中で農作業にいそむ人々の姿を見るにつけ、今年こそ苦労や心配の少ない年であるよう願わずにはいられない。

作物の生育や収量は、気象条件と耕作者の努力に左右されるが、近年は広い意味での社会情勢によって、農業の動向が大きく影響されている。規模が大きく専門的な経営の多い北海道では、そのことが農業者のみならず、地域全体に及ぼす影響も大変大きい。

最近の農業政策を見ていると、安全とか安心という文言が、やたらと目に付く。農産物の大部分は人間の口に入るものであるから、安全なものを供給するのは当然のことであり、そのことに異論をはさむ気は毛頭無い。

だが、生産に携わる現場をないがしろにして、食料の安定供給はできない。生産した農産物が売れなければ、農業が成り立たないことは自明の理であるが、同時に農業生産が減少すれば農業地域の経済は低迷し、関係する業界も立ち行かなくなる。そのことを念頭に置いた農業政策の推進が必要であろう。

中でも、地域の農業を維持していくための担い手を確保することが、急務である。

近年は、楽をして儲けることが才覚とされる風潮が強いようだが、マネーゲームならいざ知らず、物作りに王道は無いはずである。しかし、農業に携わる者として人間に変わりはない。できれば農作業の労苦を軽減したいと思うのは当然である。そのための技術開発はかなり進んだが、まだ解決すべき課題は多い。

農作業の負担に加えて、就農を躊躇させている大きい要因は、農産物価格の低迷と、その先行きあまりに不透明なことであろう。

国民全体の合意により、農産物の自給率を決め、国内での目標生産量を示して、その量は再生産を保証するような施策がないと、農村地域の崩壊と荒廃を招きかねない。

人間が口にするもので、無機物は塩と水だけ、それ以外の食べ物は、全て生物の命を頂いていると言っても過言ではない。その食料の多くを生産しているのが農業である。海外からの食料輸入は、現在のところ、支障なく行われているようである。しかし1億2千万の国民の食料を、将来とも海外に頼ったままにしても大丈夫だろうか。地球の気候変動や、国際情勢の変化などを考えると、安定的に海外に食料を依存することが、必ずしも保証されてはいないだろう。農業の軽視は将来の国民の生命の軽視だと言えないだろうか。

国民の生存を保証するための食料確保について、生産供給する側も消費する側も、ともに知恵を出し合い、食料不安のない将来を目指したいと願うこの頃である。